

基調報告

「政治と私」を学ぶ

仲間を増やそう

全国革新懇代表世話人・神戸女学院大学教授

石川 康宏

おはようございます。「基調報告」ということです。内実は若いみなさんへのおじさん世代からの問題提起です。片方の耳で聞きながら、ご自身の体験とか、周りを見ながら、自分たちの世代で考えていることを軸にみなさんなりに消化、検討していただければよいと思います。

さてお話をタイトルは「『政治と私』を学ぶ仲間を増やそう」としています。未来を切り開く展望は、政策的にはもう出ていると思います。問題は、その展望を切り開く主体的な力が育っていないということです。主体的な力をどう育てるかという展望が見えないと、やはり希望は持てないということになってしまいます。そこに大きな課題があると思います。そこで今日は、一緒にその政策を実現していく仲間をどうつくるのか、どう取り組みを広げていくのかということを考えたいということです。

先日、ある研究会でうかがったのですが、関西大学の吉田栄司先生。大阪の九条の会の事務局長をされている憲法学の先生ですが、吉田先生の「憲法」の授業を聞いた約300人の学生は、投票率が65・4%でした。若者は何をしても選挙に行かないというわけではない。投票の意義が分かつて、世の中変えられるかもしれないという展望が見えれば、ちゃんとこうした行動をとるわけです。そういう働きかけ方を私たち伝えあい、学び合う必要があると思います。

若い世代は、全体として貧困や不正義に対する怒りや強い不満を持っている。だが、その状況を変えられるという展望が持てないでいる。怒りはあるが、現実に対する諦めもあるという状態です。そこを抜け出すことが課題です。中学、高

「私の言葉」で基礎から語れる知性が必要

校の授業では、衆参両院があつて、三権分立ですといった抽象的な制度論は学ぶが、今の政治の争点がどうであり、1票を投票することにどういう意味があるかといったことは教えられない。僕の大学の授業では、この1週間日本でこんなことがありましたねといったことの紹介に時間をかけていますが、それをしばらくやると学生から「先生、日本に野党ってなにがあるんですか」といった質問が出てきます。知らないわけです。学校でも教えられていないし、親世代から、まりの大人たちからも教えられたことがない。

ですからたくさんの人的心に届く話しをするためには、そういうレベルから話しをせねばならない。今回の参院選挙で、安倍さんを批判するだけでなく、希望の見える政治を大いに語ろうとすることが言されました。これは非常に重要な提起だつたと思います。しかし、あわせてさらに手前のハードルとして、政治と私ってどう関わってるの？ 何で政治なんて考えないといけないの？ 何で選挙に行かないといけないの？ こういうより基礎的な問題を学び、考える機会をつくる必要があると思います。そこに一定の理解がないと、いくらい政策を語つても届きません。「それは私には関係のないことだ」と入口でシャットアウトされてしまします。

若者は政治のわかる人になりたがつてている

2つ目に、私たちと政治との関わりについて少しお話します。政治に関心がない、自分には関係ないという言葉がよく聞かれますが、それにも関わらず、政治はいつでもわれわれに関わってきます。関係ないといいくら叫んだところで、今は消費税10%を払うようにさせられているわけです。政治に関心がないとつっぱることは簡単だけど、誰も政治と無関係には生きられません。ここは話の入口でしっかりと確認されることだと思います。

つづくわえておくと、希望を語ろうというときの話の中身の紋切り型という問題があります。希望を語ろうとみんなで言って、中身もみんな一緒だと、若い世代からは「気色悪い」という声が聞こえてきます。「みんなで同じことをいう集団

は気持ちが悪い」ということです。もちろん安倍政治に代わる政治をとなれば、みんなの考えることに共通性が出てくるのは当たり前ですが、その共通性の語り方にはそれぞれ個性があつて当然です。「私なりにあれこれ考えた結果がこうなんですよ」という、語りの独自性が必要ですし、当然それがあるはずです。他人の発言のオウム返しには何の魅力もないということには、いつも注意が必要です。こうなると、現場で運動する一人ひとりの知性、教養が決定的になってきます。私のあたまで考えた結果ですから、当然私の言葉で語れますよということになつていかねばなりません。教養豊かで自立した諸個人が自覺的に共同する団体やネットワーク。こういう組織のあり方を私たちは目指さないといけないのだと思ひます。

いま日本中の6～7人に1人の子どもが、ご飯が満足に食べられないという状況におかれています。その子どもたちの貧困の背景には子育て世代の貧困があります。子育て世代の貧困が集中しているのがシングルマザーです。こういう現実が広がるなかで、安倍首相が全国の児童福祉施設に届けた手紙があります。その内容は、「子どもたちに向けて「未来を担う皆さんへ、未来を決めるのはあなた自身です、頑張ってください」というものです。あなたの方のために政府はあれをします、これをします、だからもうしばらく頑張ってください」と言うなら話は分からぬでもないですが、何ひとつ政治が、自分たちがやることを書いていない。自己責任論ということです。子どもの貧乏もおまえやおまえの家族のせいだ。そこから立ち上がりれるかどうかおまえの問題だというわけです。こんな政治のもとで私たちは安心して暮らせるでしょうか。

「政治は関係ない、変わらない」という言い方の背後には、「だって変えられないでしょ」という無力感があると思いません。無力感はあるが、おかしい、なんとかならないものかとは思っている。これでいいとは思っていない。しかし、変える力がない、えていける展望が見えない。その結果、無力感が腹の中に不満としてうつ積し、いろんなかたちで弱いものに向かってしまう。海外の人に向かってしまったり、マイノリティーに向かってしまったりしているように思います。

大学のゼミで2004年から11年まで「慰安婦」問題を学んできました。学生たちと一緒に毎年韓国の「ナスムの家」

にも行つて、水曜集会の現場にも行くという取り組みをしてきました。その取り組みは5冊の本にまとめてあります。その後、2012年からは原発エネルギー問題の勉強をして、この夏も学生たちと福島の被災地へ行つてきました。8年半経つて、いまだに復旧の手が入っていない地域がかなり広範囲に残っています。そうした問題も学生たちと一緒に4冊の本にまとめました。そうすると神戸女学院大学に通う「お嬢」たちが、なぜそういうハードな社会問題に取り組むのか、「慰安婦」問題は組織的なレイプの問題ですから、できることなら耳を閉ざしたい問題だろう。しかも、70年も、80年も前のいわゆる歴史問題です。そういう問題になぜ学生たちが真剣に取り組んでいるのか、そのあたりの学生たちの育ちを聞かせてほしいという依頼も入つてきます。

2019年の正月に全教のシンポジウムで、「主権者教育」について話をしてほしいと言われ、ゼミ生に「政治と私」「18歳選挙権」について聞いてみたことがあります。

なかなか面白かったのは「18歳選挙権を得たとき（彼女らはその第一世代です）、どう思ったか」です。「政治を知らない私が投票しても意味がないと思った」「お母さんに連れられて投票したが、これで何が変わるのかなと思った」「学ぶ機会もなかつたので白票を投じた」「自民党に入れた、今思うと恥ずかしい」などの声がありました。ごく普通に中学、高校を終えてきた学生たちの素直な声です。じゃあ「選挙権を得るのに向けて、中高ではどういう教育が必要だと思う？」と質

聞いてみると、意見がどんどん出てきました。「私は歴史の科目で、平等や人権について学び、政治に意見する権利は大事だと学んだ」という声の一方で、「社会問題を授業で教えるだけじゃなく、みんなで意見を出し合い、話し合うような機会がほしかった」。そういう声がたくさん出でてきます。そういう機会があれば私はもっと育つたよと思つていてるわけです。「選挙制度の歴史も全部受験勉強だった気がする。現実政治の理解にはつながらなかつた。意見交換の機会や、生徒が自分で調べる機会をつくつてほしい」といった声も出でてきます。

さらに、なかなか手厳しかつたのは先生方への意見です。「機械的に教え込まれただけ」「先生に感情がない」「先生の個人的な意見を聞いたことがない」「大学で情熱をもつて自分の意見を述べる人に初めて出会つて衝撃だつた」などの声です。裏を返すとこれは中高の先生方への、中高の教育への期待です。本当に教えたいことが自由に教えられないという先生方がおかれている状況の厳しさも見えます。さらに1件、こういうのがありました。「担任は左翼で、自分の意見を押し付けられた」「こんな人は嫌いだ、何を伝えたいのかも分からなかつた」。語ることの内容がどうあれ、ものの言い方には工夫がいるということですね。

ざつくり僕なりにまとめてみると、学生は政治についての知識をほしがっています。「私の1票にどういう意味があるのか」「私と政治の関わり方を教えてほしい」と。政治を考える力を養いたいと思っている。そうしないと今の世の中を変え

られないし、いつまでたつても、いい年をして「関心がない」っていうそぶりで生きていかないといけない。本当はそこから抜け出したいと思っている。そこは大いに信頼して、それこそ言葉だけでなくちゃんとリスクペクトして、語りかけていくことが大切です。

デンマークが示す日本の「のびしろ」

国連が国別に「幸福度ランキング」を発表しています。7年間で3回世界一になつてゐるのがデンマークです。日本はダラダラ下がつて今は58位です。とても「先進国」などと言える状況ではありません。

そんなデンマークはどんな社会なのかをちょっと確かめてみます。デンマーク大使館のツイッターがなかなかよくできており、そこからいくつか選んでみました。「デンマークでは、幼稚園から大学までの教育費が全て無料であることをご存じですか」。ご存じですかって問い合わせますね。つまり日本人は大変ですねって言つてるわけです。デンマークでは、子どもがオギヤーと生まれてから学費の心配は1円もない。さらに大学、大学院に在学中は毎月約10万円の奨学金が支給されます。支給ですよ。つまり返す必要がなんんです。貧乏な学生だけじゃなく全学生にです。バイトをするな、しっかりと勉強してくれつていうことです。どうしてそこに税金をかけるかというと、年寄りより若い人が賢くならんと社会はよく

ならんだろうっていう、当たり前の見識なんですよ。だってじいちゃん、ばあちゃんが一番賢くて、父ちゃん、母ちゃんがちょっとボーッとしてて、若い世代が一番ものが分かりませんってなつたら、その社会に未来はないですよね。だから、じいちゃん、ばあちゃん頑張りました、父ちゃん、母ちゃんはさらに学校にも行きました、今の若い世代が一番賢いです、こういう社会にすることで、社会の未来を開こうとしているわけです。言われてみれば当たり前のことですが、よく考えられた国づくりです。

デンマークは医療、介護も無料です。病院には会計の窓口がありません。診てもらつて薬をもらつたらそのまま帰ればいいんです。政治は国民の命や健康を守る仕事をしなければならないとなつてます。そういう政治づくりの背後には、それを目ざしてきた主権者の取り組みの歴史と力量があります。日本社会との本当の差はそこにある。

デンマークの有給休暇は年6週間です。消化率はほぼ100%。1年間にひと月半職場に行かなくとも給料は満額振り込まれるんです。ですから、子どもたちと一緒に夏休みには長期休暇に出かけていく。ついでにいうと、小中学校には夏休みの宿題もありません。じゃあ、子どもたちの勉強はどうなんだというと、実際には北欧の学力はとても高い。なぜかというと、家庭が教育を考えるからですよ。いまの日本社会は、教育は金で買うものだと思い込んでいる。その結果、親が、大人が、人を育てる力を失っている。本来、そうじや

ないですよね。先生がどう言うかは知らないけれど、お父さん、お母さんはこう思うよ、と大事なことは自分で教えていくのが親の務めです。もちろんそうするには親にゆとりが必要ですが。

デンマークの最低賃金は1650円ですよ。日本の倍近くある。そうすると、あくせく長く働く必要がなくなります。労働時間の上限は週37時間です。デンマーク大使館がこうツイートしています。「デンマークでは子どもとパパをよく見かけます。仕事を早く切り上げて子どもを迎えに行くので、帰宅のラッシュアワーは3時半ぐらいから5時ぐらいです」。3時半ぐらいから正規雇用のお父ちゃん、お母ちゃんが帰り始めるんですよ。そういう社会がSF小説の中ではなく、いまこの時間に地球の裏側に実在しているのです。

そんな具合で経済はちゃんとまわっているのか。過去40年ほどをふりかえると、GDPは一直線に伸びています。日本は1990年頃から「失われた30年」になつてます。1人あたりの労働生産性も、1人あたりのGDPもデンマークの方が日本よりはるかに上です。かつては、社会保障が充実したら人は働かなくなるなんて言う人たちがいましたが、社会保障が最も充実している国でこそ人びとは安心して働くことができ、社会の豊かさをわかちあうゆとりをもつようになっています。そういう社会が地球の裏側にあることを伝えた上で、日本の今を考えてみないかと問い合わせることが大事だと思います。そうしないと「日本をこう変えよう」といつても

「理想論だ」と思われてしまう。だから日本にとつては理想に思えることでも、それをすでに実現している社会がある。そのことを伝える必要があると思うのです。一人親家庭の貧困率がO E C D の中で1番低いのはデンマークで、逆に1番高くてグラフに入り切らないのが日本です。

デンマークは消費税が25%ととても高く、それはきついと思えますが、デンマークの税収は消費税だけではありません。税収の67%は直接税で、基本は所得税になっています。みんな同じ税率で納めるのが平等だという日本の政府のような形式主義ではなく、豊かなところから苦労のあるところへという「所得の再分配」が行われています。それから、税は税率がどうかだけではなく、その税を払うことで生活がどう改善されるかということとのバランスで考えなければなりません。「この税を払えば、学費も医療費も介護費用もいらないのか」ということとの兼ね合いで考える必要があるのです。日本では税金をいくら出しても、われわれの生活に返ってこない。そこに大きな問題があるわけです。

デンマークのツイートでエライなと思うのは、でも私たち昔からそんなちゃんとした国だったわけじゃないんですよ、と自分から語っているところです。昔は苦労があつた、それをつくりえてきたんだと言うのです。2019年6月、デンマークでは総選挙がありましたが、その投票率は84・5%です。投票に行かない方が圧倒的な少数派です。つまり、現在のようなデンマーク社会のあり方は、たくさん的人が望ん

で、力をあわせてつくりあげてきたものなんです。そこにデンマークの主権者の力がある。いま日本では「市民と野党の共闘」を市民が主人公になってすすめる動きが強まっていますが、そういう主権者らしい主権者がたくさんいる社会、主権者らしい力を市民が豊かに身につけた社会の1つが、そこにはあると思います。

数年前にアメリカの大統領選挙でバーニー・サンダースといふ人が活躍して話題になりましたよね。「私は民主的社会主義者だ」という人がアメリカ大統領の有力候補として出てくるようになつたということで、そのサンダースが念頭している「社会主義」というのは、実はこのデンマークのことでした。大資本が優遇され、人々は自己責任で生きるべきだとされる新自由主義の元祖アメリカで、新しい改革をこうして大胆に訴える力が育っている。日本でも、同じような声を強くしていくことが可能だと思います。デンマークと日本の格差に落胆する必要はありません。現在のデンマークが日本に見せていくのは、日本社会のこれから進歩の「のびしろ」で、それは「理想論」でなく「現実的な可能性」ということですから。

基本のキから一緒に学べる仲間をつくろう

さて、そういう社会づくりに向かう主体を、一緒に考える仲間をどうやって広げていくかという問題です。社会をどう変えるかの政策的な方向は、先に述べたように、かなりはつ

きりしていると思います。夏の参院選で野党が合意した13項目の共通政策は、本当に充実したものになっています。この内容の実現にむけていつしょに闘うと宣言した野党はすでに日本にもたくさんあるわけです。こうなると問題は、そういう志をもつた人たちを政権の座につかせていく主権者の力になります。13項目の内容は、簡単にまとめてしまえば、1人の落ちこぼしもなくみんなが大事にされる社会、みんなが学校に行けるし、腹を減らした子どもなんていらない、年寄りも安心して生きて行ける、若者も8時間働けばちゃんと食つていいける、もちろん平和な社会、こういうことです。どれも当たり前の理想だし、夢ではなくて実現可能なことばかりです。もう少しいえば、これは理念としては日本国憲法に書いてあります。問題は、これらの実現を目指す政権がつくれるかということですよ。未来に向かって、安倍政権批判だけではなく希望を語ろうと言うときに、そこでは政策の希望を語るだけでなく、その希望を現実にするのに必要な人々の成長の可能性を語る必要がある。

その点では、従来型の学び、呼びかけ、集い、いわゆる試されずみのやり方をもつと広げながら、あわせて「政治と私の基本のキ」を学び、考える機会を広げていかねばならないと思います。根本から、本当の入口から一緒に学び、考えてみませんかという取り組みです。その取り組みは、何党に入れようとか、どういう人たちを応援しようという話にすぐにはたどりつきませんが、それでいいのだと思います。急が

ば回れということです。広いすそ野があつてこそその高さです。社会全体の政治的教養をどう高めるかという大きな構えをもつことが必要だと思います。

この夏、学生と一緒に沖縄へ行き、基地問題、平和問題を学んできました。沖縄のある大学の学生たちに嘉手納基地の案内などをしてもらいました。そういう学生サークルがあるんです。面白かったのは、このサークルには政治的見解を共有「しない」という大前提があるんです。辺野古の新基地建設にどういう態度をとるかを共有しない、米軍基地をどう評価するのか、それへの態度をサークルに加わる前提条件にしない。理由を聞くと、こういうのです。「僕たちが基地とか政治を語つても、『すごいね、きみたち頑張つてね』と他人事のように受け取られる現実が、沖縄にあるんです」。そうして突き放されてしまうところを、どうやって引き寄せるかって考えた結果が「見解はどうあれ、その前にまず一緒に学ぼう」というサークルづくりになったというのです。

「空の上、オスプレイが飛んでいるだろう、何でこんなことになつているのか」「街の中、米軍基地だらけだろう、どういう歴史でこんなふうになつてているのか」「そこを一緒に学ぼうよ」というサークルです。そのサークルの学生5人が来てくれたんですが、少なくともうち4人は、個人の判断として「僕は辺野古の新基地建設には反対です」「迷う部分もあるけれど私も反対です」といった意見を語っていました。一人ひとりが真剣なんです。「共通見解」に頼つて、それを繰り返せ

ばいいというつくりになつていなことが、彼らに真剣にものを考えさせている。ヘリコプターの点検部品が空の上から落ちてきた緑ヶ丘保育園にも行き、そこで2時間ぐらい園長先生の話を聞き、子どもを預けている保護者、お母さんの話を聞いたのですが、そのときに5人の学生たちは正座をして、うち4人はイカツイ男たちなんですが、前のめりになつて話を聞いて、うちの学生よりも先に質問の手をあげていました。その姿勢には、現実に対する不満や疑問があつて、それにどう対応するかの答えを「自分で」出さねばならない真剣さが見えました。「個」が育つてているのです。そうしてよく考える「個」が進んで力をあわせあう時、その力は「とりあえず団体には入っています」という人々の力とは比べ物にならないものになると思います。ぜひ参考にしてください。

まとめてみますね。1番目、若い人たちには現実への不満と未来への閉塞が共存している。閉塞は政治を変えられない、変わらないという無力感の表れでもあり、じつはそれは年配の世代も同じです。2つ目に、しかし、その閉塞を打ち破つて、はるかに前に進んでいる社会がいまの地球上にある。それを念頭すれば日本の閉塞は「のびしろ」の大きさの裏返し。日本の現状はどうにもならない行き止まりでなく、大きな可能性をはらんでいるということです。3つ目に、日本の希望を語る時、政策だけでは十分でない。政策を語つてこの指とまれと言うだけでなく、いつしょに未来を開く仲間をどう増やしていくか、そこの展望が語られないと不十分。そし

て最後の4つ目ですね。分からぬ、関心がないという人との接点を広げることこそ運動の中心にすえていく必要がある。「正しいことを言つていれば、いまに多数派になる」という他力本願でなく、多数の人と接するチャンネルを自らつくり、そこで仲間になつていかねばならない。そういうふうになると思います。

若いみなさんの関心に、少しでも響くところがあればいいのですが。これで終わります。